

KYOKY 135

特集 教育研究改革・改善プロジェクトについて



京都教育大学

<表紙>

『ぜったいできるよ、カメくん』

附属京都小中学校初等部2年 藤原 孟徳

いつもようふくがなかなかきめられないカメくん。

友だちのカメに上からおどろかされて、「少しおちついて考えてみたらどうや?」と言われました。その日からきせつやきおんに合ったふくを早くきめられるカメくんになりました。

くふうしたところは、カメくんのおどろいたひょうじょうと、こうらのぶ分を着せかえできるようにしたことです。

<裏表紙>

上段

『キリンくんからのメッセージ』

附属京都小中学校初等部2年 太田 絢祥

キリンくんが野原を歩いていると、おなかがすいてきました。小鳥がチュンチュンと鳴いているところを見たら、大きな実のなる木がありました。りんごみたいなにおいがします。「おーい。おいしそうな実がなっているよ。」とみんなをよんでいるところです。

フルーツを星形に切ったり、草を1枚1枚はりつけて色をつけるのをがんばりました。

下段

『神さま、ありがとう!』

附属京都小中学校初等部2年 賀長 凜子

くまさんが野原であそんでいたら、うさぎの神さまが天からおりてきて、いい子にしていたからプレゼントをくれるところの絵です。神さまが池におりてきたら、必ず虹がかかります。虹の上では、神さまの弟子たちがしゅぎょうをしています。うさぎの神さまの羽やつえ、天しのわっかのデザインを気に入っています。

おちこんでいたり、元気のない人に見てもらって、楽しい気持ちになって元気になってもらいたいと思います。



CONTENTS



<表紙> 附属京都小中学校初等部2年 藤原 孟徳
<裏表紙> 上段 附属京都小中学校初等部2年 太田 絢祥
下段 附属京都小中学校初等部2年 賀長 凜子

特集

- 2 教育研究改革・改善プロジェクト経費とは？
副学長（研究推進担当）
太田 耕人
- 3 「ダンス・パレット・フォア・スクールズ」
プロジェクト
プロジェクト代表 体育学科教授
井谷 恵子
- 5 「健康・セクシュアリティなど教育実践における
ライフスキル教育の活用」について
プロジェクト代表 教育支援センター教授
関口 久志

海外見聞録

- 7 フランス、イタリアへの学会参加のご報告
教育学科准教授
伊藤 崇達

留学生の声

- 9 なんとかっていう国から日本へ
教員研修留学生
サンフォ・モハマドゥ・バッシロ・ジャン・バティスト
（ブルキナファソ出身）

研究余滴

- 10 少年十字軍
社会科学科教授
八塚 春児

京教今昔物語

- 12 教師を育て、教師が育つ豊かな風土
大学院連合教職実践研究科長
高乗 秀明

京教学内探訪

- 14 キャンパスに点在する彫像、立体作品群
美術科教授
谷口 淳一（文）
美術科准教授
丹下 裕史（写真、一部文）

附属学校園だより

- 17 整った環境で全国に発信！
附属桃山小学校副校長
兒玉 裕司
- 18 附属学校としての使命紹介
—平成26年度の本校の研究から—
附属桃山中学校副校長
藤原みつる
- 19 わくわくして出かけよう、園外保育！
附属幼稚園副園長
斎藤真由美

新任の先生から

- 21 歴史において最良の教育であるために
教育学科講師
神代 健彦
- 21 次世代を担う教員養成
教育支援センター教授
西井 薫
- 22 人間教師を育てる
大学院連合教職実践研究科准教授
小川比呂志

卒業生の声

- 23 向き合うことの大切さ
在マレーシア日本国大使館付属クアランプール日本人会日本人学校 教諭
河越 久栄
- 23 「学び」と「実践」を大切に
京都市立納所小学校 教頭
藤田 路乃

学生広報委員会

- 24 今年度もお世話になります ～談話室&附属図書館 特集～
- 25 ～隣の学生さん～ 第1回 考古学研究会って何!?

ようこそ大先輩

- 26 京都教育大よ永遠なれ
京都教育大学名誉教授 京都外国語大学教授
齋藤 榮二

読者の皆さまへ・編集後記

- 27 地域連携・広報委員会委員長
細川 友秀

教育研究改革・改善プロジェクト経費とは？

副学長（研究推進担当） 太田 耕人

ご存知でしょうか？——「教育研究改革・改善プロジェクト経費」

ながーい名前です。

学内限定の競争的資金の一種なのですが、一息に言うのがむずかしいせいか、「学長裁量経費」と呼び慣わされています。この「裁量」という言い方が、誤解を招きます。

「良さそうなプロジェクトだから、予算をつけてあげましょう」と、学長（またはその命を受けた研究推進室）が裁量して、融通むげに予算を配分している、そう勘違いしているひとがいるようです。

たしかに経費の出どころは、学長裁量経費と称される費目です。ただしそれは、今年であれば1500万円を教育研究改革・改善プロジェクトに使うように、学長が「裁量」して使途を定めた、というほどの意味なのです。どのプロジェクトを採り、いくら経費を出すかを、学長や研究推進室が自由に裁量して決めていくわけではありません。

研究推進室で何週間もかけて審査し、厳正な基準で採用を判断しています。年度末には今度は成果を、また別の基準に拠って評価しています。

採否の基準となるのは、次の5項目です。

1. **目的** 本学の目的及び制度の趣旨に沿うものになっているか？
2. **整合性** プロジェクトとして認められる内容及び運営体制を備えているか？
3. **有効性** 成果に有効性や影響力があるか？
4. **明確性** 申請内容が明確かつ厳密か？
5. **予算の適正性**
 - ・削減可能な費用の請求はないか？
 - ・個人研究費等、支出可能な予算が他にないか？
 - ・支出の積算は厳密になされているか？

大学が文科省に概算要求する特別経費のプロジェクトがある場合は、5項目すべてが高い水準になるため、たいていそれが最上位にきます。他は「本学として是非進めるべきもの」、「要求を認めてもよいもの」、「条件によっては認めてよいもの」、「不採用」に仕分けされ、その順で申請額からの減額が増えていきます。たとえ内容的に高く評価されても、削減可能な予算が計上されていれば、当然その部分は削られます。

また、継続されるプロジェクトの場合、成果報告書を「目的の達成」「報告の明確性」「経費の使途」「成

果の公表」の4項目で評価し、すぐれたものには、次年度の配分に一定額を加算します。

多くの申請が出てくるため、最上位であっても配分できるのは申請額の8割です。最下位の「条件によっては認めてよいもの」に至ってはわずか2割。上位のものが多ければ予算が不足し、最終的に「不採用」に格下げされる恐れもあります。

多くはない資金です。本学の目的に合致し、成果が見込めるものがどうしても優先されることになりません。第一に、**概算要求や科研費など大規模な研究につながるプロジェクト**です。科研費申請の準備には、個人研究費の他、本学では科研支援費が申請できますが、基盤研究（A）（B）等、計画が大がかりで、準備にも多額の経費が必要なものに支援します。ちなみに科研費に採用されれば、直接経費の3割にあたる額が間接経費として大学に配分されます。

第二に、**教員組織が協働するプロジェクト**です。ことに附属学校教員と大学教員の共同研究は教員養成大学の本領と言ってよいでしょう。桃山地区のNIE（新聞活用教育）や、京都地区の「認知促進の視点を取り入れた授業カリキュラム普及」などがその例です。

上の二つが主になるのは、本学のミッションに照らしても当然のことと考えています。一方で、数は限られますが、カリキュラム開発や現代的教育課題への対応等の研究も採択しています。

今回本誌で特集されるプロジェクトは両方とも、いみじくもこの第三のカテゴリーに属します。先端的で高度な研究や、附属学校との大規模な連携ほどには目立ちません。それだけにこうして意義を認めていただいて、たいへんうれしく思っています。

「ライフスキル」は学生本人が身につけるだけでなく、将来、現場で子どもを指導するとき、たいせつな視点を提供してくれることでしょうか。毎年、充実した報告書が出てきて感心させられています。

「ダンスパレット」は中学校でのダンス必修化を機に、体育教員も含めた、ダンスに縁遠い人たちにダンスの多様さと楽しさを紹介する試みです。踊ることは自らの身体を知覚する貴重な体験ですが、体育のわずかな授業時間で指導するのは至難の技です。現場で戸惑う教員と生徒に手をさしのべ、さあ踊ろうよ！と励ます、すてきな企画です。

「ダンス・パレット・フォア・スクールズ」プロジェクト

プロジェクト代表 体育学科教授 井谷 恵子

なぜ、このプロジェクトを？

「ダンス」に対する印象は、「女性に適したもので、難しいステップを覚えたり複雑なリズムにのらないといけない」というものが一般的です。先生達は「表現・ダンスは苦手、どうしたら良いか分からない」と言い、保健体育の教員でさえ、スポーツとは勝手の違うダンスの指導に戸惑っているところがあります。

スポーツには明確なルールがあり、勝敗や順位を競うという分かりやすい目標がありますが、ダンスはむしろイメージなど見えないものから何かを創り出すことが中核になっているからです。スポーツとダンスを対比してみると、「自己や他者への挑戦 ⇔ 自己や他者との対話」「量的な評価 ⇔ 質的な評価」「力やスピード ⇔ 自在な身体と動き」など、対極ともいえる特徴があります。異なるからこそ、体育の中で、スポーツとダンスを取り扱う意味があるのですが、学校も社会もサッカーや駅伝など競技性のあるスポーツをはるかに高く位置づけているのが現状です。

学生に学校での表現やダンスの経験を尋ねると、「全然やったことがない」「運動会のマスゲームが嫌だった」と貧しい体験しかしていないという実情がわかります。「スポーツは分かりやすいし好き」だけでも、「ダンスはどうしたら良いか分からない」「恥ずかしい」という答えも多く返ってきます。中には「男子校だったからダンスはなかった」という返答もあります。

実際には、小学校の体育授業では以前から「表現運動」は必修の領域でしたし、中学校でも武道・ダンスの選択必修として位置づけられてきているのです。さらに、平成20年の学習指導要領の改訂により、中学校1-2年生では、武道とダンスがともに必修の領域になりました。にもかかわらず、前述のような学生の経験にはさほど変化がありません。



ワークショップ広報ちらし（部分）

未来の教師や現職の先生方に、スポーツと同じように、表現やダンスの教育的価値を理解していただき、学校で指導する動機づけや教材の引き出しになればと始めたのがこのプロジェクトです。「人と違うからいい」「ダンスに間違いはない」「他と優劣を比べなくていい」「人は身体で笑って泣いて悔しがる」ことを伝え、だからダンスは楽しくて難しくないことを実感してもらおう取組みの始まりでした。



ダンス公演（H25）ステージ風景

どんな内容？

このプロジェクトは平成25年度に開始し、初年度は、呉竹文化センターのホールを使いダンス公演の形式をとりました。趣旨は、観る人にも出演する人にも、ダンスの時空を超えた多様な拡がりとともに、自己表現や創造、テクニックの追求、芸術性、社交、コミュニケーション、エンターテインメント性など、ダンスのゆたかな可能性を感じてほしいということでした。

幸いにも、大学は人材と情報の交差点のような位置にあり、私たち大学教員はこれらを縦横に結べるという有り難いポジションにいます。ダンスの場合も、見



ダンス公演（H25）学生パフォーマンス

渡してみると、コンテンポラリー、モダン、ジャズ、ストリート、ボールルーム（社交ダンス）など、多様な専門家が周りにいました。

「ダンス・パレット」という名称も、多様なダンスの拡がり発展の可能性を視野に入れた上で、日々の授業を計画し実践してほしいという願いが込められています。例えば、若者に人気のストリートダンスは、今や女性以上に男性の文化になりつつあります。本学でも講堂前で踊る学生が大勢います。しかし、ストリートダンスが権威への抵抗や社会への異議申し立てとして誕生していること、だからラップやダバパンとセットになっていることを多くの学生たちは知りません。

初年度は、プロダンサーや指導者のパフォーマンスを中心に、「ダンス」授業履修学生や有志の学生、附属学校の子ども達も含めた「観て、知って、体験する」ダンス公演としました。2回目の今年度は、4つのワークショップを企画しました。下表のような内容で、短時間のワークショップの中で、ダンスのおもしろさを味わってもらおうという企画でした。丁寧に基本から学ぶという方法では、おもしろさを味わう前に諦めたり飽きたりしてしまいます。授業の教材づくりと同じで、ダンスの醍醐味を味わってもらうために、内容を熟考し精選することを大切にしました。この意味では、参加者だけでなく、企画し指導する側もパワーアップしました。

<p>A コンテンポラリーダンス 「伸びて 縮んで 回って 跳んで！ からだと遊ぶダンス 大発見！」 飯田陽子：ダンスグループ Pöya Day 主宰／本学非常勤</p>
<p>B ストリートダンス 「"Happy"にチャレンジ！ ストリートダンス」 近江望：Hope dance circle 主宰／本学非常勤</p>
<p>C ボールルームダンス（社交ダンス：サンバ） 「Ballroomへようこそ～社交ダンス出来ちゃいました！～」 山口隆久・福本ともえ組：河内正人ダンススタジオ所属／JDFP プロラテンアメリカンA級</p>
<p>D ジャズダンス 「カラダでうたう JAZZ ダンス!! ～Sing Sing Sing～」 森井裕子：Reverb.YMV 主宰／Tmpp スタジオ所属、AAP 登録ダンサー</p>
<p>ワークショップの内容と指導者</p>

どのように運営？

企画運営には、体育学科、音楽科、教育支援センターの教員、附属学校教員のほか、非常勤の教員、地域のダンス指導者・プロダンサーに関わっていただきました。申込受付や当日の受付には事務職員にも支援

を頼みました。いずれもダンス普及に役立ちたいというほとんどボランティアでの参加でした。

大学外の方々が多かったために、対面での会議は最小限にし、情報共有サイトをフル活用して、意見交換と情報共有をしました。音楽や映像もネット上で共有しながら準備を進めました。参加者管理については、「からだ・表現・学び合いのパレット」というウェブページを開設し、そのページから申し込むシステムとしました。このページはダイジェスト版や教材の発信という役割も併せ持っています。インターネットを活用した効率的な運営やビデオ・写真の編集などは、ダンスに詳しいプロモーション会社が採算度外視で加わって下さったおかげで実現しました。音楽の演奏やアナウンスには音楽領域専攻の学生が、当日のスタッフには体育領域専攻やダンス部の学生が加わり、ダンスだけでなく人々の交差点にもなりました。



ワークショップ風景 (H26)

成果と課題は？

初回のダンス公演では600席が満席となり、今回のワークショップでもスペースが不足する盛況でした。広報は様々な媒体を通して行いましたが、基本は「歩く広告塔」で、「どこでも話題に、誰にでもチラシを渡す」というアナログ方式でした。学生は溢れる情報の中で生活しているためなかなか食い付いてはくれませんが、実体験をすると期待以上の学びになります。問題は忙しい現職の先生達の足取りが重いことです。

公演でもワークショップでも学内外の多くの人達との関わりなくしては実行できません。点在する専門家や地域の方々、学内の教職員や学生を結び、そこに化学反応のように新しいものを生み出す試みです。時間も手間もかかる、でもワクワクするプロジェクトです。



プロジェクトの成果や学習素材のページ

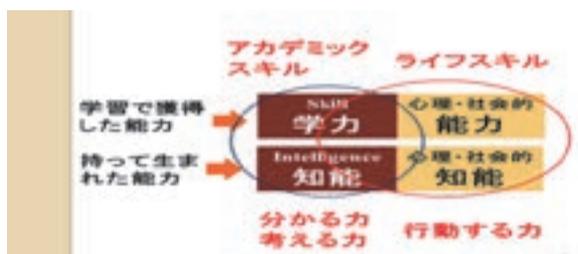
<http://www.manabi-pallet.ac>

「健康・セクシュアリティなど教育実践における ライフスキル教育の活用」について

プロジェクト代表 教育支援センター教授 関口久志

(1) 「ライフスキル」とは

「ライフスキル」とは、これまでの学力・知能といったアカデミックスキルの「わかる力」「考える力」から、行動する力である心理・社会的な能力・知能を重視するものです。(次の図参考)



それは、ただ単に「分かる、考える、覚える」という「認知的能力」以上に、よりよい人間関係を結び、自己を振り返り、励ましていく「対人関係能力」「自己管理能力」を身につけていく実際のな力を重視しています。(次の図参考)



すなわち子どもたちが個性ある自己と他者を尊重し、社会の一員として責任ある行動が取れるよう、肯定的な集団づくり、自己規律・責任感・自信などの形成、他者とのコミュニケーション能力、問題解決能力、目標設定と計画、批判的思考力などの能力を向上させることを目的とします。教員養成段階におけるライフスキル教育は、本学学生たちが自身のライフスキルを高める機会だけでなく、教員になったとき子どもたちにライフスキルを指導する力量を育てる力をつけるという二重の意味を持ちます。

(次表参考) 世界保健機関 (WHO) が定義づけた
ライフスキル 10のスキル

- 1自己認識 自分の長所や短所など自分のことを認識した上で、イメージをプラスに捉えることができるスキル
- 2共感性 周りの人の意見、感情、立場、気持ちに対して「そのとおりだ」と感じとることができるスキル
- 3意志決定 いくつかの方法の中から最善だと考えられるものを判断し、選択するスキル
- 4問題解決 問題やその原因を見極め、何が起こったのかを正確に予測、推測、判断できるスキル
- 5効果的コミュニケーション 人をコントロールしたり、人にコントロールされたりすることなく、人間関係を損なわずに上手にコミュニケーションができるスキル
- 6対人関係 好ましいやり方で、人と人との良好な関係をつくったり、維持することができるスキル
- 7創造的思考 問題解決したりするときどのような方法があるか、また、問題がない場合でも豊かな発想ができるスキル
- 8批判的思考 めまぐるしく入ってくる情報や経験を、客観的な方法で分析するスキル
- 9情動への対処 自分や周りの人の不安や喜怒哀楽の感情を認識し、不安や苛立ちを振り払い、苦しい状況においても、落ち着いた対応ができるスキル
- 10ストレスへの対処 ストレスを解消するための行動や、生活スタイルを変えたりすることでストレスのもとを少なくしたり、緊張したときにリラックスする方法を学び、探し出すスキル

(2) プロジェクトの意義・目的

これまで、本学ではH21年度から継続してライフスキル教育関連プロジェクトを推進してきました。

同時にH23年度からは教育学部の自由科目として「ライフスキル教育」が設置され、H25年度から集中講義ではなく前期の通常授業として、より取得しやすく改善しています。また毎年、ライオンズクラブの支援を得て、キャリア支援としてのワークショップも2月末に継続実施されています。これらのプログラムを継続的に評価検証することによって、教員養成におけるライフスキル教育をより効果の高いものに改善でき

フランス、イタリアへの学会参加のご報告

教育学科准教授 伊藤 崇 達

平素より本学関係の皆様方には大変お世話になっております。研究活動に携わせて頂いておりますこと、深く感謝いたしております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。私の拙い研究になりますが、本年度、フランスとイタリアへ学会参加のため外国出張いたしました。その一端をここに報告させていただきます。

◆フランス、パリでの学会参加のご報告

独立行政法人 日本学術振興会から科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の助成を受けて、2014年7月8日から13日にかけてフランスのパリ国際会議場にて開催された第28回国際応用心理学会議（International Congress of Applied Psychology）に参加させていただきました。科研費の研究課題名は「協働学習において調整が社会的に共有されるプロセスの解明（基盤研究(C)、研究課題番号26380881)」になります。



学会会場に向かう道中のパリ市内の様子（セーヌ川）

この会議は、心理学の国際学会として歴史のある国際応用心理学会（IAAP）が主催するもので、4年ごとに開催されています。100か国以上、4500名を超える心理学者の参加があったようです。日本の心理学研究者も多数参加しておりました。この学会は応用心理学の18の部会で構成されており、組織心理学、環境心理学、コミュニティ心理学、健康心理学、スポーツ心理学、カウンセリング心理学など、多岐に亘ります。私は、教育心理学・学校心理学の部会を中心に参加し、発表をいたしました。

私自身の研究の専門領域としては、学習心理学になりますが、とりわけ自己調整学習（Self-Regulated Learning）の問題をテーマとしてきております。自己調整学習に関する研究では、人の「自ら学び自ら考える力」はいかにして育つのかについて、心理学の見地から実証的に明らかにしていくことをめざしています。

学会への参加を通じて、現在もなお国際的に検証が進められているテーマであり、さらに実践性を高める方向で研究が進んでいることを改めて確認いたしました。



学会会場のエントランス



学会会場内での様子

個人的に目を惹かれた研究の動向について少しお伝えしますと、教師自身の動機づけの成長や発達について心理学の観点から実証を試みる研究や、学習過程における感情、情動の問題を深く掘り下げた研究など、こうしたテーマがかなり進展してきていることがあげられます。学会の開催期間、フランスのエスプリを肌で感じとりながら、海外の心理学研究者から多いに刺激を受け、充実した時間を過ごすさせていただきました。まことにありがとうございました。

◆イタリア、パドヴァでの学会参加のご報告

本年度は、もう1件、外国出張をいたしました。こちらは、公益財団法人 博報児童教育振興会（博報財団）から「2014年度 第9回 児童教育実践についての研究助成事業」による助成を受けたもので、2014年8月27日から30日にかけてイタリアのパドヴァ大学にて開催された国際学会に参加させていただきました。研究課題名は「小学校教師は子どもの学習規律の内在化をいかに促しているか」になります。



パドヴァ大学の構内



パドヴァ大学の「英雄の入口」にあるフレスコ画『人類と文化』

今回参加させていただきましたEARLIと略称されるヨーロッパ教授学習学会（European Association for Research on Learning and Instruction）は30年以上の歴史があり、ヨーロッパ諸国を中心に56か国の約2800名の研究者が会員となっております。SIG（Special Interest Group）という分科会が24あり、例えば、アセスメントと評価、インストラクショナル・デザイン、動機づけと情動、教師教育、ライティング、特別な教育的ニーズ、メタ認知などの専門テーマが設けられています。隔年で全体での大会とSIGごとのカンファレンスが交互に開催されています。本年度は、SIGがヨーロッパの各国にて開催される年であり、私は、イタリアで行われた「教授学習における社会的相互作用、文化の多様性」のSIGに参加してまいりました。全体での大会ではなかったこともあり、日本人の参加は私だけのようでした。

「教授学習の多様性にかかれた空間」がカンファレンスの主テーマで、私の関心である教室における学習

研究の最先端の状況を掴んでおくことができました。教育心理学では論理実証主義に基づくアプローチが研究の中で中心を占めてきた経緯がありますが、談話や対話、語りに着目していく質的アプローチや、ピアとの学び、協働学習に焦点をあてて学習の過程を解明していこうとする研究など、新しい研究の流れを学んでおくことができました。



学会会場に向かう道中のパドヴァ市内の様子

先述のとおり、私の研究テーマは自己調整学習にあるのですが、他者との学びを通して、調整がいかにか社会的に共有されてくるかについて視点を広げて明らかにしていこうとする流れが出てきています。そのあたりの動向を含めて、最新の研究知見をまとめたハンドブックが刊行されました。塚野州一先生のもと、その監訳に携わらせていただきましたので、ここにご紹介させていただきます。私はさておき、翻訳の分担執筆を担っていただいた先生方は教育心理学の第一線の錚々たる研究者であり、まことに恐縮ですが、この場をお借りしてお奨めさせていただきます。



2014年9月に北大路書房より刊行させていただきました翻訳書の表紙

以上、2件の学会参加について概略ではございますが、ご報告とさせていただきます。貴重な学びの機会をまことにありがとうございました。

なんとかっていう国から日本へ

教員研修留学生 サンフォ・モハマドゥ・バッシロ・ジャン・バティスト
(ブルキナファソ出身)

初めての留学はアメリカだったが、三週間しかなかった。来日し、初めて長期外国に住んでいる。

2013年10月3日関西国際空港に到着して、シャトルバスで向島学生センターまで行った。日本の自然を見たかったが、時差ぼけで寝てしまった。向島学生センターではもう準備ができていたので、入居が簡単だった。

そのセンターで他の国の留学生に会って一緒に沢山のことができた。初めて京都教育大学に行く時は、その学生たちの一人が大学まで連れていってくれた。しかし、その人も日本に来たばかりだったので、行き方や電車の乗り方など、あまり知らなかった。もちろん私たちは困った。道で会った日本人のおかげで大学に着いた。大学で沢山の書類事務をしたり、案内を聞いたりした。だいたい全部日本語で、何も分からなくても記入していた。日本語での書類事務は大変だった！

次のチャレンジは京都大学の日本語の学校だった。最初は頑張っても無理な感じだったので、この言語を絶対に覚えられないと思っていた。また、この言語は発音が珍しいし、文字も絵みたいだと思っていた。でもどんどんもっと練習して楽しくなった。先生たちもいい先生だったからいつもサポートをしてくれた。最初のことを思い出すと、面白い。京都大学で学びながら、日本のことを勉強した。沢山友達ができ、観光したり、カラオケに行ったりした。京都大学の最後は卒業式だった。すべての学生たちは日本語で発表したが、自分のテーマは空手をやっているから日本の空手とブルキナファソの空手についてだった。残念だったが、別れの時間になった。京大でできた友だちとは今でも連絡を取っている。



京都大学での卒業式

京大から京教に来て生活が変わってきたと感じている。京教は京大ほど大きくない大学だから、他の学生

ともっと仲良くなりやすいし、いつも友達に食堂で会える。前学期たまたま京教の空手部に行っていて、今空手部のメンバーになった。その時一番大変だったのは、日本語だった。自分の能力がそんなに高くなくて、短い文しか作れなかった。他のメンバーに手伝ってもらってよかった。空手部のおかげで沢山の友達ができたり、旅行にいったりした。今では家族のようである。



受けている授業はすべて日本語で行われた。半分以上分からなくて、たまたま全然分からなかった。そんな時は大変悔しかったが、自分の自信は悔しさより強かった。ブルキナファソで「ブルキナファソ人はいつでもどこでも勇気がある」ということわざがあって、諦めるということは悩んでも言えない。それで今では日常会話ができるし、漢字も読める。もっと読めるように努力している。

大学で学んで、社会でできた友だちと日本の文化や日本人の精神など経験している。今電話でおじぎすることがある。



もっと言いたいことがあるんですがこれで終わりにします。

三島由紀夫に『海と夕焼』という短篇がある。

文永9年(1272)の晩夏、鎌倉建長寺裏の勝上ヶ岳へ、年老いた寺男と一人の少年が登ってゆく。寺男の名は安里(アンリ)といい、その異貌の故に天狗と呼ばれている。山上に座して稲村ヶ崎の海を眺めながら、安里は耳の聞こえぬ少年にフランス語で語り始める。

私はセヴェンヌの羊飼だった。ある夕暮、キリストに会い、次のように告げられる。

「異教徒のトルコ人たちから、お前ら少年がエルサレムを取り戻すのだ。沢山の同志を集めて、マルセイユに行くがいい。地中海の水が二つに分れて、お前たちを聖地へ導くだろう」

やがて私は親しい羊飼いにこの話をし、噂は広まった。フランス各地で同じようなことが起こっていた。フランスやドイツの各地から数千人の子供たちがマルセイユに向かった。マルセイユの港に着き、岸壁で私は祈った。永いこと祈った。何日も空しく待った。しかし、海は分れなかった。

そのとき一人の男が近づいてきて、自分の持ち船でエルサレムまで連れて行くことを申し出る。私たちは勇んで船に乗り込んだが、船は聖地に向かわず、エジプトのアレキサンドリアに着いた。そして奴隷市場で、私たちは悉く売られてしまった。

その後ペルシア商人の奴隷になり、さらに売られてインドへ行った。当時、仏教を学びにインドに来ていた蘭溪道隆によって自由の身となり、彼に伴われて日本へ来たのである。

今もありありと思い出すのは、いくら祈っても分れなかった夕映えの海の不思議である。今も解せない神秘は、あの時の思いも及ばぬ挫折、とうとう分れなかった海の深紅の煌めきにひそんでいる。おそらく安里の一生にとって、海がもし二つに分れるならば、それはあの一瞬を措いてはなかったのだ。そうした一瞬にあってさえ、海が夕焼に燃えたまま黙々とひろがっていたあの不思議……。



マルセイユの港(筆者撮影)

この作品は自選短編集(『花ざかりの森・憂国』新潮文庫、1968)の三島自身の解説の中で、『詩を書く少年』『憂国』とともに「私にとってもっとも切実な問題を秘めたもの」と語られており、「どうしても書いておかなければならなかったもの」だという。とくに『海と夕焼』は、「奇跡の到来を信じながらそれが来なかったという不思議、いや奇蹟自体よりもさらにふしぎな不思議という主題を、凝縮して示そうと思ったものである。この主題はおそらく私の一生を貫く主題になるものである」とし、「なぜあのとき海が二つに割れなかったか」という奇蹟待望が自分にとって不可避なこと、同時にそれが不可能なことは、実は『詩を書く少年』の年令のころから、明らかに自覚されていた筈なのだ」と結び。

三島という人を考えるとき、ことにその最期を想起するとき、ここから様々な問題が浮かび上がる。周知のように、彼は昭和45年(1970)11月25日、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地の総監室のバルコニーから演説をした後、自衛隊員が決起に応じないのを見て自刃した。当時私は大学2年生であったので、その時のことは鮮明に覚えている。

それにしても、三島は何を考えていたのか、今もよくわからない。彼は本気で自衛隊が決起すると信じていたのだろうか。それとも、決起しないことは承知の上で、自刃を前提にいわば遺書のつもりで檄文を書き、演説をしたのだろうか。

私は三島の研究者ではなく、これについての論争史は押えていない。ただ、十字軍研究者として、『海と夕焼』はいつも気になっていた。マルセイユの岸壁で一心に祈った少年たち、いくら祈っても海は分れなかった不思議と思いも及ばぬ挫折を、三島は自分自身に重ねることはしなかったのだろうか。至誠を尽くしても結果が得られるとは限らないことは、まさに彼が少年のころから「自覚されていた」のであり、当の本人が一番よく知っていたのではなかったのか。

しかし、と思う。少年十字軍の挫折は、まさに西洋ゆえの、ないしはキリスト教ゆえの限界だと考えていたのかもしれない。

もう一度『海と夕焼』を見よう。かの稲村ヶ崎は、新田義貞の鎌倉攻めに際して海の干上がる奇蹟が起こった場所である。少年たちにモーセの奇蹟は起こらなかったが、義貞の至誠と尽忠には神慮もこれに応じ

たのである。そして、文永9年という年は、その2年後に元寇がある。まさに神風の奇蹟が起こったのである。十字軍には起こらなかった奇蹟も、日本では起こったのではないか。

こう考えると、稲村ヶ崎という場所も文永9年という年も、決して無頓着に選ばれているわけではない。そこには三島の明らかな意図を読み取るべきであろう。その鎌倉に少年十字軍を登場させる発想は、まさに非凡な才能を示して余りあるものがある。

この短編を書くにあたって、三島が何を典拠にしたのかはわからない。しかし、ここでは典拠にこだわるまい。少年十字軍はわが国でも古くからよく知られている話なのである。実に、明治以来わが国の世界史概説書のなかで十字軍が語られるとき、最も好まれた主題の一つだったといってもよい。純粋な少年たちが、その純粋さゆえに悲劇的な最期を遂げる話は、何か日本人の琴線に触れるものがあるのだろう。

しかし、とここで私は歴史研究者に戻る。実は少年十字軍については、必ずしも正確にはわかっていないのである。とくに、少年たちが悪徳商人にだまされてアレクサンドリアに奴隷として売られる話は、時代の下がる史料にしか出てこず、虚構の可能性がある。

この運動は、フランスとドイツの二つの流れがあった。このうち、三島が題材を取ったのはフランスの方だが、フランスの少年十字軍は実態がはっきりせず、そもそも十字軍であるのかも明確ではない。

同時代の史料が伝えるのはこうである。1212年6月、ヴァンドーム近傍のクロワ出身でエティエンヌという羊飼いの少年が、貧しい巡礼姿のキリストに出会い、国王への書簡を託される。書簡の内容は記されておらず、キリストが何を要求したのかわからないが、エティエンヌのまわりには大勢の少年たちが集まり、パリに向かった。同様の運動が各地に起こり、彼等はエティエンヌを盟主と仰いで集結した。しかし国王は解散を命じ、大半は帰郷した。

同時代史料からわかるのは、これだけである。『海と夕焼』で重要な役割を果たすマルセイユの港での祈りも奴隷商人も、同時代史料には出てこないのである。

一方、同じ年にドイツで起こった運動は、より十字軍の性格がはっきりしている。こちらのリーダーはケルン出身のニコラウスという少年であった。聖地を回復すべくエルサレムを目指し、アルプスを越えてイタリアに入った。その一部はプリンディジにまで到って渡海しようとしたが、その地の司教の許可が得られず、空しく帰郷した。往路は少年達を暖かくもてなした沿道の人々も、帰路は冷淡であり、帰郷できたものは僅かであったという。また、一部はマルセイユに向

かったという史料もあり、マルセイユの悲劇もこちらならば事実であった可能性がある。ただし、マルセイユでの結末は伝えられていない。

世に「抹殺博士」という言葉がある。明治時代の史学者重野安繹が、それまで実在と考えられていた人物や史実とされてきた逸話を、実証主義に基づき片端から否定してしまったため、このように呼ばれた。私もここでは抹殺博士になってしまったようだ。もちろん歴史学の目的はそれだけではないが、しばしば抹殺博士たらざるを得ない場面にも遭遇する。

しかし、その際に痛感するのは、むしろ歴史学の無力である。一旦世間の通説となってしまったものを、個々の歴史学者が否定したところで、容易に修正できるものではない。特にそれが人々の感傷に訴えるものであったり、説明が単純で分かりやすいものであればあるほど、そうである。

それはたぶん、人々がそう信じたいからだろう。例えば、吉良上野介は強欲非道な人物ではなく、むしろ浅野内匠頭のほうが短慮な暗君であった、というような説が出されても、誰もそんな話は聞きたくない。だから、少年十字軍の悲劇の物語も、決して廃ることはないだろう。とくにこの話は、十字軍の「墮落」という通説と一体になっている。

今も一般に通用している図式に、次のようなものがある。初期の十字軍は「純粋な宗教的動機」に支えられて、ひたすらエルサレムをめざしたが、時代とともに純粋性を失い、初期の情熱は経済的利害など世俗的目的に取って代わられた、というものである。そして、そうした墮落した大人たちに対して、「純粋無垢」な少年十字軍が対比され、その故にこそ、その悲劇性は際立つ。

しかし、その図式は間違っている。第一回十字軍は決して純粋な宗教的動機に支えられて、ひたすらエルサレムをめざした人々からなっていたのではない。むしろ経済的・政治的その他さまざまな世俗的理由から参加した人々のほうが多かった。そして、後期の十字軍も世俗的利害に圧倒されたわけではなく、むしろ後期の十字軍のほうが宗教的義務意識は高まったように思われるのである。

今まで、私はいろいろなところでこのことを繰り返し主張してきた。しかし、教科書や概説書ではいまだに「純粋→墮落」という図式のままである。そして、少年十字軍の悲劇もしかり。いわば確信犯なのである。だが、最近ではもうあきらめている。所詮遠い昔の遠い西洋で起こったことなど、ロマンティックな感傷の中で理解しておけば、それでいいのかもしれない。

教師を育て、教師が育つ豊かな風土

大学院連合教職実践研究科長 高 乗 秀 明

京都教育大学とこれほどまでに長く深い関わりを持つことになることは、夢にも思っていませんでした。東大入試の中止が決まり、友人に誘われて地元の国立大の2期校という理由だけで受験した者が、学生で5年、附属学校教員として25年、大学教員で14年、人生の中心となる時期を本学と共にし、今春定年退職を迎えることに不思議な感慨を覚えます。44年間の歩みを振り返りつつ、今後の教員養成の在り方を考えたいと思います。

1. 教師が育つ大学とは

1969年、第一社会科学科Ⅱ類に入学しました。学芸大から教育大に変わった3年後でしたが、学生新聞は京都学芸大学新聞の名を掲げ続けていました。専攻は哲学や法学など社会科学で構成され、社会科学教育法は倫理学の教授の担当でした。

授業は一般教養科目や専門科目が印象に残っています。長瀬英三先生の西洋哲学史や深田祝先生の生物学など、学問の奥深さを教えられ知的好奇心を刺激されました。社会学専攻でしたので初めは山村薫一先生に最後の2年間は村井研治先生に指導いただきました。山村先生の新明正道の総合社会学の講義や村井先生のロシア家族社会学の講読、奈良県の野迫川村での社会調査実習などが印象深く思い出されます。

教員養成を目的としていましたが緩やかな空気の流れる大学でした。特に一社Ⅱ類は中高の社会科教員養成課程でしたが、入学時点で私のような志望動機の者がおり、また、高校の教員採用は厳しい状況であったこともあり、公務員や民間企業への就職者が少なからずいて、教員養成大学であることをあまり意識させない雰囲気がありました。教員志望でなかった私も暖かく迎えてもらいました。



1979年3月 初めての卒業生（京中31期生D組）8人と一緒に

このことは、現在と比べると教育課程や授業内容、就職支援等が教員養成大学としては不十分であったという評価になるのですが、一方で「教師が育つ」という点で大切なものがこの時代にはあったのではないかと思います。

在学中は大学紛争とその影響が色濃く残っている時期で、大学を超えた学生の交流が盛んでした。京大・立命館大・同志社大等の学生達と関西学生社会学セミナーという研究会で交流を深めたり、友人を通じた繋がりで東京の学生グループと共同で青森県で社会調査を行ったり、学内では経済学の葛西孝平先生に顧問を引き受けていただいて「公害問題研究会」を組織し学習会や水俣病裁判の支援活動を行ったりと、授業外での活動が強く記憶に残っています。教員志望でなく入学した私が教員をめざす契機となったのは、「伝習館問題」との出会いでした。教育への関心が高まり、大学院進学も勧められたのですが、教育の可能性に挑戦したく高校教師をめざそうと思いを定めました。

今振り返ると、他大学の教員養成学部でない友人との出会いと交流を通して、広く社会への関心や問題意識を共有し、授業外で自主的、自発的な学習や研究の機会を作り出そうと活動できたのは、時代性と同時にそれらを育てる土壌が当時の大学にあったからだと思います。本学にも学生のそういった思いを受けとめ、後押しをしてくれる寛容な教員の眼差しがありました。おそらく、それらは形を変えて現在も受け継がれてきてはいると思うのですが、教員養成カリキュラムの体系化、緻密化が進み、教員採用を支援する体制が整うほどに、学生には自由な時間と空間がなくなっていくように思えます。教職は一定の制約があるとはいえ、教育活動の場での裁量の幅は広く、主体性と自律性に基盤を置く専門職です。自律性と主体性が育つ環境、風土こそが教員養成大学には不可欠なものです。

2. 附属学校での実習指導を支える授業研究

大阪での2年の教員生活の後、1976年25歳で本学附属京都中学校に移り、以後25年勤務することになりました。附属学校は教育実習生の指導と教育の実践的研究がその設置目的になっている学校です。

多くの実習生を担当してきましたが、今は50歳代になり多くは学校や教育委員会で要職に就いている人たちと実習の時の話をする機会が何度かありました。赴任直後から30歳頃の実習生で私の記憶は臍げに

なっているのですが、彼らは当時の指導の様子を克明に話してくれます。指導教員の力量という点では未熟な時期であるにも拘らず、実習生へのインパクトという点ではこの時期が一番ようです。お互いの年齢があまり離れていないことが要因かとも考えましたが、話を聞くうちにその謎が解けてきました。

「あなたのやりたい授業は何なのか」「何を子どもに伝えたいのか、どんな力を付けたいのか」「そのための教材や資料の独自性は」そんな問いを実習生に投げかけていたようです。実習生は土日も教材研究や資料づくりに追われていたとのこと。指導案の書き方や授業技術の指導よりも、授業づくりのための基盤となることを強く指導していたようです。

思い起こせば、それは当時の私自身の課題でもありました。授業づくりの基軸をどのように設定するのか、それを受けどのように授業を組み立て、教材や資料を選択、準備するのか、その過程で授業者としての思いや考えをどのように具体化すればよいのか、そのようなテーマを実習生と一緒に考えていたのです。実習生と指導教員というよりも、授業の共同開発者という関係であったのかもしれませんが。

附属京都中学校では、授業研究は日常の光景として位置づいていました。在任中は授業研究の潮流が「授業の近代化・わかる授業」から「生徒の意欲的主体的な学習と多様な学習活動の展開」へと大きく転換する時代でした。研究授業の準備のため学校で夜を明かしたり、授業研究会が夜10時過ぎまで続くことも珍しくありませんでした。毎週二つの授業が組上に乗せられる授業研究会と、全員が公開授業を行う2年毎の全国発表会は、一人ひとりの授業力を鍛える場でした。

当時は授業研究と実習生指導は別のものであると思っていたのですが、今は逆に両者は分かちがたく深く結びついていると考えています。指導書にそった標準的な授業ではなく教師の個性が発揮された授業を、という実習生指導での志向性は、実は授業研究の取り組みの姿勢からきているのだと気づいたからです。

教育実習での子どもとの交流が教員志望の契機となったという話はよく耳にしますが、学校ボランティア等での学校現場体験が増えた今、教育実習の役割も変わっていくと思います。附属学校での教育実習の強み、特色が問われます。それは指導案の書き方や授業技術の指導が丁寧であるというレベルではなく、最先端のテーマで授業研究に取り組んでいる教員だからこそ伝えることのできる授業づくりの本質が学べるという点ではないかと思います。

附属学校の研究環境のいっそうの整備拡充が、教員養成の質の向上という点からも強く望まれます。

3. 教職大学院での取組から生まれた問い

2001年附属学校から附属教育実践総合センター教員に配置換えになりました。実地教育プログラムの開発と運営が任務で、教育実習の改革と並んで大きな仕事になったのが実地教育の体系化でした。学校ボランティア活動の普及に努めると共に教職科目や教科専門と呼応する形で実地教育科目の新設に取り組みました。

2008年、本学と京都の7つの私立大学、京都府・京都市両教育委員会との連携による京都連合教職大学院が本学に設置され、その専任教員に、2011年からは研究科長職に就きました。

教職大学院での教員養成ではより実践的な指導力を育成するため、10週間に及ぶ学校での実習や、学校や教育現場へ出向いての授業、グループワークを主体とした模擬授業や事例研究等の演習形式の授業など、これまでになかった新しい教育課程と授業運営で教員養成の高度化を図っています。また、多数を占める学部新卒院生に焦点を当てた教育課程の改編にも取り組んできました。その成果は教員志望者のほぼ全員(90%台)が教職に就くという就職状況や採用後のフォローアップでの高い評価に見ることが出来ます。

さて、私たちはごく当たり前に「教員養成」という言葉を使っていますが、大学院での教員養成という最先端のテーマに取り組む中で、自己矛盾になります。そもそも教師は「養成」できるのかという問いに至りました。もちろん、教育学や心理学を教え、学習指導の技術を伝えることで教員としての必要な能力を養成することはできますし、今もこのことに全力を注いでいます。しかし、教師としての資質能力が個々の知識や技能の集合体ではなく、教師として本質となる部分、核となるものを中心に形成されていくものであるとするならば、そもそもそれは大学や大学院の課程で「養成」できるものなのかという問いです。

人が人を教えるという営みの中で、教師としての本質的な資質にあたるものがあるとするれば、それはその人が生まれてから今日までの育ちの過程、生き方と不可分、本人の日々の生活の中で育まれ磨かれてきたものであり、これからも本人の自覚によって高められていくものではないか。そうであるならば、教員養成大学・大学院と教育の世界には、そのような資質を内に持った人たちをいざなう魅力、資質が豊かに育つ土壌・風土が求められるのではないのでしょうか。

「教師を育てる」ために教育課程等を整えることと「教師が育つ」ための環境を整えることの間にはどのような違いと繋がりがあるのか。ようやく教員養成の大きな問い、哲学を巡る問いに辿り着きました。これから先は若い人たちへバトンを委ねます。

キャンパスに点在する彫像、立体作品群

美術科教授 谷口淳一(文) 美術科准教授 丹下裕史(写真、一部文)

京都教育大学は緑が多いキャンパスとして有名です。野鳥の鳴き声、落ち葉の色などを自分の五感を通して感じることができます。特にグラウンドの西側にあるメタセコイヤの大木とともに見える夏の夕焼けは感動的です。とても素晴らしい時空の中で、学生たちが日々、研究に勉学や制作、そしてクラブ活動に励める環境を大切にしてほしいと思います。

また、他大学と比べてキャンパスには美術科の元教員の作品や卒業生の彫像や立体作品が多く設置されています。鳥たちが飛び交い、木々が立ち並び、緑があふれる美しい中で、作品が自然と溶け込み、息吹を感じます。学芸について深く研究する大学としての雰囲気をとて醸し出していると思います。彫像は形体も素材もまちまちで半永久的に保存できるブロンズ像、軽くて比較的丈夫な樹脂で作られた像、石膏像、セメント像、石像、陶芸作品など個性豊かです。

元教員の作品としては校門を右側の講堂前に故松田尚之の力強いブロンズ像、男女の群像「追懐」(写真1)が立っています。富山県の黒部第四ダム記念像「尊きみはしらに捧ぐ」の制作者でもあります。C棟前には故山崎正義のブロンズ像、姉弟の像「はぐくむ」(写真2)があります。四条大橋東にある歌舞伎の創始者「阿国」の像の制作者です。図書館前には故杉村尚の量感のあるブロンズ像「真理は一なり、そのイメージは万化なり」(写真3)。京都駅新幹線構内「こころのとも」の制作者です。図書館の中庭には故番匠宇司の白いセメントの抽象作品「円の戯れ」(写

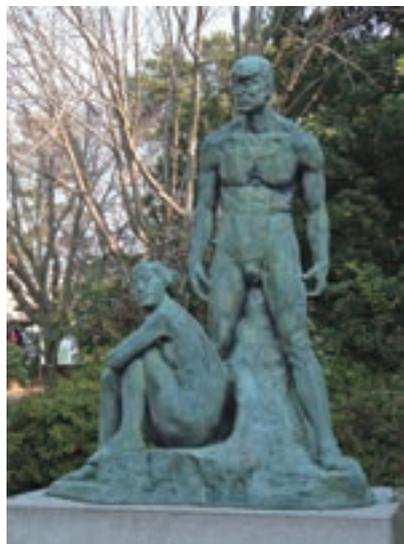


写真1「追懐」(故松田尚之 作)



写真2「はぐくむ」(故山崎正義 作)



写真3「真理は一なり、そのイメージは万化なり」(故杉村尚 作)

真4) が置いてあります。

一番皆さんに知られている作品はグラウンド前にある「蒼空」(鈴木佳子 作)(写真5)で、卒業生の作品です。2年前に色を塗り替え、広く蒼い空と彫像とのコントラストが心地よい空間を作り出し、学生たちにも親しまれています。彫像のあるロータリー付近で学生たちが集い、いろいろとイベントが行われる光景は京教ならではのものです。

美術棟付近は授業で作られた作品などが置かれています。計画的に置かれたのではないので、不思議な空



写真4「円の戯れ」(故番匠宇司 作)



写真5「蒼空」(鈴木佳子 作)

間となっています。特修美術の時代の学生が残した作品と今の学生が置いた作品とが混在しています。その時代の心の動きが形や素材、置かれた場所から伝わってくるようです。悩んでいる顔に見えたり、ラピュタの城のようにも見えるオレンジ色で土の素材感があるテラコッタの作品(写真6)。なにやら面白い形が寄り添い、それぞれの物体の表面から新しい生命が生まれ繋がっていきこうとしている植物のような作品(写真7)。樹脂で作られた女性像(写真8、9、10)。石の作品は重いので持って帰ることができないので多くの作品が残っています。祈りのかたちを表した大理石像(写真11)と、悩み横たわっている砂岩の像(写真12)。すべて学生がイメージを広げ、考え、汗を流し形にした作品で、作者の顔が浮かんできます。普段、何げなく作品の前を通り過ぎるのではなく、僅かな時間でもいいので足を止めて、その作品からのメッセージを想像してみたいと思います。

美術棟とトレーニングセンターの間には、手入れの



写真6



写真7



写真8

行き届いた雑木林があります。美術科の教員、学生の間で通称「いわむらのもり」(絵画の岩村教授が毎年「作庭実習」で学生とともに整備しています。)と呼ばれているところで、分け入ってみると、程よく枝打ちされた明るい林の中に、枯山水のような地形が造られています。また、学生がところどころに作品を残しているの、それを見つけるのも楽しいところです。(写真13)



写真9



写真10



写真11

この「いわむらのもり」のまえに佇む日干しレンガのモニュメント（写真14）は、美術科と附属特別支援学校高等部との合同ワークショップで制作されたものです。5年という時を経て森と調和し、少しずつ土へ還っていています。実はこの日干しレンガには西洋カラシナの種が練り込んであり、雨が降るたびにレンガから緑の芽が出たり、また地面へ流れ落ちた種が成長しモニュメントが黄色い花で囲まれたりしていました。今ではほとんど見られなくなりましたが、暖か



写真12



写真13



写真14

くなると思い出したように出てきた芽を見つけることができるかもしれません。

この他にも、キャンパスの中には、風景の中に隠れた作品がたくさんあります。一度、キャンパスをゆっくり歩いて探してみませんか？

整った環境で全国に発信！

附属桃山小学校副校長 兒玉裕司

京都教育大学附属桃山小学校が平成26年1月6日の始業式より、新しくなった校舎で学びの場がスタートしました。職員と業者で1月4日・5日と二日間かけ、体育館が職員室・図書室・多目的室・倉庫として使われていた場所から荷物を新しく完成した校舎に引っ越しました。ただ、全ての環境が整ったわけでは無く、備品や機器等を徐々にそろえ、10月末に本当の完成を迎えました。無線LANの増設、1年生、2年生、3年生教室に最新の電子黒板をホワイトボード前面に設置、多目的ホールに畳をプラスしたりして整備しました。10月末の学校説明会では、校舎見学もして頂き、沢山の方が、この恵まれた環境に感心されていました。そして、この環境を活かして、文部科学省から研究指定を受けて、4年目となるMC（メディア・コミュニケーション科）と、新たに本年度より研究指定を受けた「英語教育強化地域拠点事業」の研究にも力を入れて頑張っています。

写真ではありますが、整った環境を紹介します。

教室（1年・2年・3年）

レールに沿って壁をスライドさせ、廊下側に寄せることができ、廊下と一体となった教室スペースが出来る。



電子黒板

3面のホワイトボードの真ん中をスライドさせると、70インチ電子黒板が取り付けられてあり、子ども達の活動場面や授業に生かしている。

多目的ホール

移動できる畳を敷き詰めることで、多目的な使い道が広がり、第40面による体験も行っている。また、80インチの電子黒板も設置されている。



図工室

広々とした空間で思い思いの創作活動が出来るように電源コードは吊り下げ式にしている。

理科室

器具が使いやすいように配置され、活動できるスペースを確保し、4箇所からの出入口を設けている。



音楽室

床は絨毯にし、カホンが40台、椅子・机・打楽器として使われる。沢山の楽器も収納でき、個人練習場ブースもある。



パソコン室

最新のノート型パソコンが39台設置され、タブレットPC充電ステーションも整備した。



英語ルーム

1年生から6年生まで外国人講師による英語の授業を行っている。活動中心の英語ルームとなっている。



図書室

床はフローリングで、学習や読書スペースと読み間かせ等のスペースがある。子どもの高さの本棚も設置。



トイレ、廊下、手洗い

トイレ、手洗いは全てオートセンサーで水が流れる。廊下、玄関はセンサーにより、人の動きで電灯が点灯する。



新しい校舎で、今年10月24日にJAET（日本教育工学研究協議会）京都大会が行われ、本校も会場校としてMC（メディア・コミュニケーション科）の公開授業を行いました。また、平成27年2月20日の附属桃山地区学校園教育研究発表会では、全国からの参会者をお迎えし、子ども達の活躍する素晴らしい姿を見て頂けることと思います。

附属学校としての使命紹介 —平成26年度の本校の研究から—

附属桃山中学校副校長 藤原 みつる

附属学校には、「大学と共同して教育の実証的研究を行い、地域の教育に貢献する」という使命があります。この紙面をお借りして本校が行いました平成26年度の研究を紹介します。

「幼小中連携教育」の研究

本研究は、平成13年から附属桃山地区学校園（附属幼、附属桃山小及び本校）で進めている研究で、各校園の独自性を大切にしつつ、教員が連携し幼小中12年間の目標・子ども像・理念を同じにして、同じ目線で子どもを見取り育てようとするものです。また子どもたちが連携し交流学习する学びの環境は自立と共生の力を併せ持った人を育てるのに寄与すると考え、大切にしています。

校種間の段差を乗り越える力は社会に出た時に役立つと考え、乗り越える力をつける研究を進めています。平成25年度からは「幼小中で育む『豊かな学力』と『豊かな社会力』—12年間の学びをつなぐ連携プログラムの実践と開発—」のテーマで、共同研究者である大学の先生方にご指導をいただきながら、月1回の合同研究会、WG毎の研究、交流学习などの授業実践を重ね、平成27年2月20日にその成果を問う研究発表会を行いました。



「思考力・判断力・表現力」の育成

現学習指導要領では、基礎的な知識及び技能を習得させるとともにこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育むことが求められています。平常の授業を充実させ、確かな学力の育成を目指す本校では、独自の研究として「社会とかわりながら自己を伸ばす生徒の育成—思考力・判断力・表現力の育成を通して—」のテーマを掲げ、全教員でこれらの力の分析やこの力をつける研究を進めています。大学の各教科の先生方による自教科でのこれらの力のとらえ方やその育成について、6教科の先生方の講義を受け、全教員で研修をしました。研究授業や事後研究会の実施などにより、教員が指導力量をつ

けることにも大いにつながっています。今年度は8教科で研究授業・事後研を実施しました。平成27年度には研究発表会を予定し、実践研究を進めています。

文科省の研究指定を受けて

加えて、今年度から新たに2つの文科省の研究指定を受けた研究に取り組んでいます。いずれも社会のグローバル化に対応する教育研究です。



ひとつは、「英語教育強化地域拠点事業」です。小学校英語の教科化にともなう、小・中・高における英語教育を研究するものです。大学の先生方のご指導を受けながら、本校と附属桃山小学校、附属高校で研究を進めています。

平成26年7月には文科省の教科調査官による英語授業の視察をいただきました。そこでの指導を踏まえ、27年度も研究を継続し、小学校での英語の学びを活かした「中学校での指導」を構築し、それを高校の指導につなげ、培った英語力や表現力で世界で活躍できる人を育成する授業構築の研究を進めたいと考えます。

もうひとつは京都教育大学とその附属学校が一丸となって研究を進める「『グローバル人材育成プログラム』の開発—幼稚園から大学までの系統的カリキュラムの策定を目指して—」の研究です。この研究は本校ではまだ緒についたばかりですが、帰国生徒教育学級が設置（昭和50年〔1975〕に設置）されている学校としての特長、また留学生との交流会や英国キングエドワードVII世校との交流などの国際教育の実践を生かすことでも、本研究に大いに寄与できるのではないかと考えています。英語教育強化事業とともに研究を進め、グローバル社会で活躍できる生徒の育成に努めます。



平成26年度は以上のような研究を行ってきました。附属の教員は多忙を極めますが、教育大学附属学校の教員であることの使命を自覚し、今後も全教員で研究に取り組んでいきたいと思ひます。

わくわくして出かけよう、園外保育！

附属幼稚園副園長 齋藤 真由美

幼稚園には、修学旅行などの宿泊を伴うような行事はないのですが、園外保育（遠足）には、毎月のように出かけています。

- | |
|---|
| 4月・5月…ジャガイモの世話（年長児親子） |
| 5月…桃山城運動公園（年長児、年中児） |
| 6月…タマネギ収穫（年長児） |
| ジャガイモ掘り（年長児、年中児） |
| 9月…虫取り（年長児、年中児） |
| 10月…サツマイモの蔓取り（年長児） サツマイモ掘り（年長児、年中児） 時代祭（年長児） 特別支援学校（年長児親子）（年中児親子） |
| 11月…伏見稲荷山（年長児、年中児） |
| 八瀬野外保育センター（年長児） |
| 12月…タマネギの苗植え（年中児） |
| 1月…梅小路蒸気機関車館（年長児） |
| 3月…お別れ遠足（全園児）・ジャガイモの種イモ植え（年中児親子）など |



園外保育の目的はそれぞれに違うのですが、概ね次のような目的をもって出かけています。

- ・園外のいろいろな自然に親しみ、歩いたり遊んだりする
- ・電車のマナーや、集団の決まりを守って行動しようとする
- ・土に親しみ、野菜の生長や収穫の喜びを味わう
- ・年長、年中児ペアのかかわりを楽しむ
- ・想像を広げながら見たり聞いたり話したり遊んだりする

これらの目的を窓口にして、本園の園外保育（遠足）をもう少し詳しくお伝えします。

<年長、年中児ペアのかかわりを楽しむ>

本園は年長児と年中児の男女ペアをつくっていて、

園外保育の時は手をつないで一緒に出かけます。1年間同じ相手とかかわることで、年長児は年齢や性の違う相手の気持ちに気づいたり、自分ではなく相手の喜び事を考えようとしたり、してあげる充実感や喜びを感じたりします。年中児は、年長児にあこがれを持ったり、やさしくしてもらえる喜びを感じたり、「自分も大きくなったら～しよう」という思いを持ち始めたりします。例えば、ペアで出かけるはじめての園外保育である5月の桃山城への園外保育では、年長児はいつも自分が車道側になるように手をつなぎ替えたり、「そっち行ったら危ないよ」と年中児の手を引いたりします。おやつのアメは違う種類を持っていて「どっちがいい？」と先に年中児に取らせてあげたり、「イチゴ（アメ）が好き？」と相手が好きであろう方（きっと自分も好きなのでしょう）を渡してあげたりします。園外保育から帰り、年中児と別れると「ちゃんと歩いてくれはらへんね」「こっちで遊ばって言うのにどっか行ってしまわはった」「疲れたー」と担任に話してきます。そんな戸迷いや緊張も、お兄さんやお姉さんになった充実感へとつながっているようにも見えます。

年中児は年長児に親しみを持ってやさしく接してもらおうこのような経験があるからこそ、自分が年長児になった時には「今度は自分が～してあげよう」という気持ちになれるのです。



<土に親しみ、野菜の生長や収穫の喜びを味わう>

野菜の栽培は、環境教育実践センターにお世話になっています。年中児の後半にタマネギの苗やジャガイモの種イモを植えておくと、年長児になった時に自分たちが植えたり世話をしたりしたという喜びを持って収穫が楽しめるのです。また、年中児や年少児に得

意気に話したり、分けてあげたりする喜びを感じることが出来るのです（とは言え、センターの方が世話をしてくださるからこそなのですが）。ですので、“野菜の生長”と“子どもたちの成長（身体と心）”は共にあると言えるでしょう。



<想像を広げながら、見たり聞いたり話したり遊んだりする>

年長児は年中児の頃から“魔女”の不思議な世界に興味を持っていたり、ほうきに乗りとんがり帽子をかぶって遊んだりしています。八瀬野外保育センターに出かける前日、“魔女”（？）から手紙と地図が届きました。明日は“魔女”のところに行くのだという気持ち、不思議心でいっぱいです。想像もどんどん広がっていきます。当日出かけると、そこには、“魔女”の家があり、家の中にはフライパンやほうきが置いてありました。もう見るもの聞くもの、「きっと魔女が～してるのや」「もしかしたら…」と想像もわくわく感もますます広がっていきます。その後、幼稚園に帰って来てからの生活の中でも“魔女”は、みんなの共通の話題となったり、魔女ごっこ遊びへと広がったりし、心の中にため込まれていきます。今、小学生や中学生、大人になった卒園児の心の中にも“魔女”への不思議心が宿っているのではないのでしょうか？



<年少児の“はじめての遠足”>

さて、ここまで年少児の話題がありませんでしたが、年少児はお別れ遠足（3月）がはじめての遠くへ

の遠足となります。園外に出かけることは大切にしているのですが、無理のない形で出かけることが楽しめるように配慮しています。園の正門の前の2メートル程の横断歩道を渡ると附属桃山小学校に着きます。その校内を少し歩くと“学習の森（南庭）”に着き、季節によっては週に1回のペースで出かけることもあります。繰り返し同じ場に出かけることで、安心感を持ったり、季節の変化を楽しんだり、「こんなことをあそでしたい」という思いを子どもたちが持って遊んでいったりすることができます。



とは言え、“お別れ遠足”はやはりうれしいはじめての遠足です。そのうれしさからでしょうか、帰りの電車の中では眠りはじめる子どももいます。そんな姿を見た年長児や年中児が「寝たはる」「かわいいね」と微笑みながらささやきます。私たちはその様子を見て、こんなふうにしてみんなで育ちあっていくのだなと実感します。

誰もがわくわくしたり、「うれしくて眠れなかった」という経験を持つたりする遠足、あるいはお出かけや旅行です。小学生、中学生、そして大人になってもずっとわくわくする気持ちが持てるような幼稚園の遠足の経験となるよう、私たちも共に楽しんでかかわっています。



歴史において最良の教育であるために

教育学科講師 神代健彦

「神代」と書いて「くましろ」と読みます。出身は九州、大学は広島、大学院は東京と、東へ東へ移動しながら過ごしてきましたが、縁あって2014年4月より、京都教育大学で教員養成に携わることになりました。みなさま、どうぞお見知りおきください。

専門分野は、日本の近現代教育史です。昭和期以降を中心に、教育の制度から実践の歴史まで幅広く（節操なく？）やってきましたが、最近では教育学の歴史も調べています。昨今、教育問題が喧しいですが、それは今も昔も同じこと。50年、100年前の議論を忘れて同じような教育談義をやっていても、進歩がありません。歴史のなかで積み重ねられてきた教育と教育学をよく吟味し、教育の現在と未来を考える確かなス

タート地点や土台を築き上げることが、わたしのしごとだと考えています。

新任教員ですが、同時に一児の新米パパでもあります。子育て、あるいは広く人づくりは、直接・間接に多くの人びとの助けを借りてようやく、ということなのだかと、日々実感します。わたしもまた大学人として、教員養成を生業とする者として、あるいは一人の市民として、この重大で難事ではありますが喜びも多い公共的なしごとの一端を、支えていきたいと考えています。

次世代を担う教員養成

教育支援センター教授 西井 薫

今年度より教育支援センターで勤務することになりました。私は、京都教育大学の音楽科を卒業し、20年間を公立小学校で、附属京都小学校と附属桃山小学校の両附属小学校に8年間ずつ、計36年間を小学校教員として勤務しました。最終は附属桃山小学校で勤務し、5年間副校長を勤めました。この度、ご縁のある京都教育大学で勤務させていただき、大学生に向けて「教育実践基礎演習」や「特別活動論」を担当しています。また、一番大切な仕事は、大学と附属学校の連携による教育実習のあり方や教員養成カリキュラムについて考えていくことです。現場の附属学校にいるときは、「本当にやる気のある学生だけを実習に来させてください」と真剣に考え、発言していました。今年度は、学生を送り出す立場になって、大学でいかに育

てて実習に送り出すかが私にとっての課題になりました。幸い両附属で実習経験があり、実習担当者として取り組んできたので、これを生かして将来現場で輝いてくれるような教員を育てるための実地教育や教育実習のあり方について考え、実践していくのが私の勤めだと思っています。ただ、大学は小学校と違い大きな組織なので、考えていることを実践したり変えたりするのに時間がかかります。しかし、今できることから一歩一歩実践していきたいと考えています。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

人間教師を育てる

大学院連合教職実践研究科准教授 小川比呂志

今年度より、京都府教育委員会から実務家教員として大学院連合教職実践研究科に派遣されました。私は、京都府の5市町の公立小学校において33年間勤務してまいりました。これまで初任者や若手教員の指導に携わってきた経験を、将来の日本の教育を担う院生への指導に生かしていきたいと思っています。

教員には広い知識と豊かな体験が求められます。そして自分自身が何事にも興味関心を抱くこと、挑戦し楽しもうとする気持ちを持つことが大切です。また、社会の激しい変化の中で新しいことを学び続ける意欲

と自分自身が幸せになることも大切です。これらを伝えていきたいと思っています。

教員としての喜びは、いのちといのちとの触れ合う喜びです。それは、教員にのみ与えられる深い恩恵だといえるでしょう。

近い将来、本学で学んだすべての院生が人間教師として学校現場で生き生きと仲間と共に活躍していることを願っています。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

向き合うことの大切さ

在マレーシア日本国大使館付属クアラルンプール日本人会日本人学校 教諭 河越久栄
(家庭領域専攻 平成21年度卒業生)

教員になって5年が過ぎようとしている。現在は在外教育施設で勤務している。今までいた学校とは全く違うのではないだろうか。海外の学校が決まった時は、不安もあった。しかし、実際に勤務してみると、教員として大切にすることは同じなんだなということに気づいた。それは、「一人ひとりと向き合う」ということだ。

生活環境が様々な子どもたちを見つめていると、それぞれの課題を見つけることができた。課題を乗り越える中で、子どもたちはどんどん成長していった。一人ひとりの成長を感じた時の嬉しさは今も初任の頃と変わらない。この仕事をしていて、大切なのは一人ひとりの課題を見つけ、その課題にあった場を設けることではないかと感じている。

また、同僚と向き合うことも大切だ。教員も全国各地から集まってくる。都道府県が違えば考え方や仕事の方法が違うこともあった。そんな時、違うものを否定するのではなく、向き合い、互いに吸収することで、よりよいものを選ぶことができた。学校現場全体と向き合うこともまた、子どもの成長につながる大切なことなのだろう。

そして最後に、自分と向き合うことも忘れてはいけない。自分がイライラしていると、子どもにも伝わるものだ。これからも自分と向き合うことで、同僚と向き合うことで、子どもと向き合うことで、一人ひとりの子どもたちを大切にしていきたい。

「学び」と「実践」を大切にして

京都市立納所小学校 教頭 藤田路乃
(大学院連合教職実践研究科 学校経営力高度化コース 平成22年度修了生)

教職について二十数年。目の前の子ども達の成長を願い、ひたすら教えることに力を注ぎできました。縁あって連合教職大学院の2期生となり、現任校の理解と協力によって、昼間に勤務しながら夜間の履修をしました。“学ぶことは、なんて楽しいのだろう…”久しぶりの「学生」という立場で学ぶことは、多忙ながらも日々新鮮で楽しいものでした。

様々な講義を聴き、社会の激しい変化とともに教育も変遷してきたことがわかり、これまでの実践の積み重ねが自分の中で整理され繋がりました。学校参観や発表や討論、講義を通して、今日の教育課題に向き合うためには、自分自身が常に学び続けなくてはならないと強く感じました。中学校・高校、府教委や他府県の先生方と同じコースの仲間として知り合

え、ともに学ぶ中で初めて知ることも多く、より広い視野で長期的な展望をもつことの大事さも実感しました。また、これから教員を目指す若い院生の教職に対するひたむきな姿勢に、忘れかけていた教師としての原点を思い起こし、学校で出会う若い先生方の夢や希望を実現できる学校をつくりたいと考えました。

‘温故知新’ 未来を担う子ども達に真の生きる力をつけるためには、学校現場や自分の中でこれまで積み重ねてきた実践や価値観を大切にしながら、新しい課題にもしっかりと向き合っていかなければならないと思っています。子ども達に直接対している現場の教員である私達には、たくさんの方の願いや期待が、日々の実践に託されているのだということを忘れずに進んでいきたいです。

空きコマって何していますか??

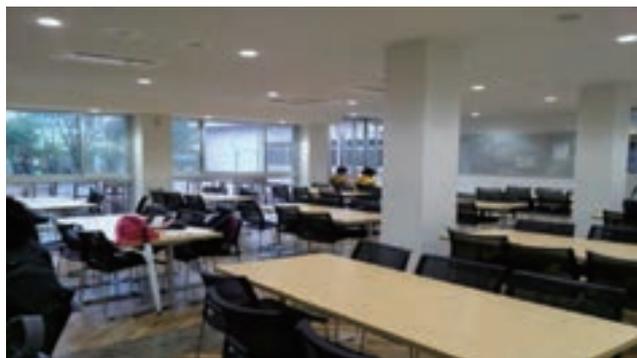
今回、学生広報委員は、本学の学生が大学内でどのような場所をよく利用して、どのような過ごし方をしているのかを知るために、授業の「空きコマ」に学生が何をしているのかを調査した。

私たちの調査の結果、空きコマの過ごし方としては「レポートをする」「予習・復習をする」といった勉強に関わるものや、それ以外にも「友達と話をしている」「部活動やサークルなどの練習」「寝る」といったものなど、人それぞれ多様な過ごし方があることが分かった。

しかし、どのような目的であれ、どのような「場所」を利用するのかということについては、ある特徴がみられた。それは「図書館」「学生会館1階の談話室（学生の間では“すばる”の名前で浸透しているが、“すばる”は喫茶店の名前であるため、以後は正式名称の談話室と書かせてもらう。）」という2つの場所で過ごす学生がとても多いということだ。そこで私たちは第2回のテーマとして「図書館」と「談話室」の2つについて詳しく調べてみることにした。

～みんなのお気に入り 談話室～

空きコマは、談話室で過ごす人が多いということで、筆者も実際に談話室に行ってみた。筆者が訪れたのはほとんどの人が授業のある3限目の時間帯であったが、ほとんどの机が利用されていた。利用している学生のほとんどが友達同士でおしゃべりを楽しんでおり、レポートや読書など勉強している人は少数であった。また別の日に行っても、ほとんど同じような光景が見られた。改装されて綺麗になり、大人数で集まってしゃべることができる施設が他にはないため、たくさんの学生が利用していると考えられる。



談話室

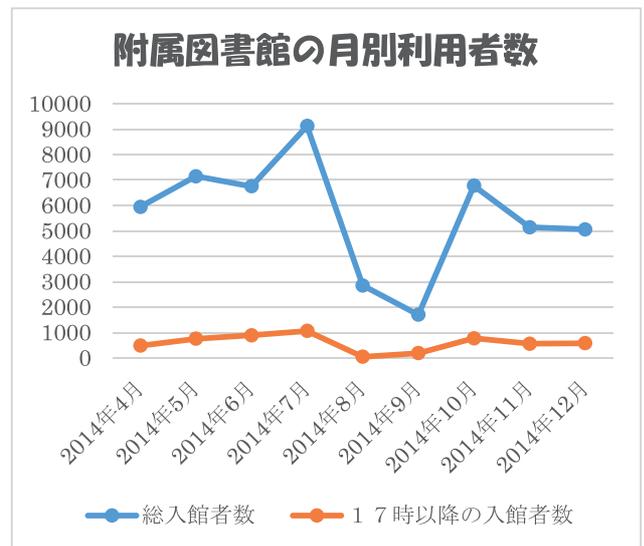
学生広報
委員会

今年度も
～談話室&

～穴場がいっぱい 図書館～

2014年4月～12月における1か月の図書館の利用者数は、夏季休暇を除くと、どの月も5000人を超える利用者がいる（下記グラフ参照）。1日平均にすると200人前後が図書館を利用しており、その8割以上は17時より前、つまり一般的な学生の履修する1～4限の時間帯であるといえる。このことから、京教生が“空き時間”を過ごす場所として人気が高いのは、意外にも(?)図書館であるという結論に至った。

しかし図書館と一概に言っても、図書や資料を貸し出すばかりではない。今や魅力あふれる場所となっている附属図書館の知られざる“穴場”を求め、取材を敢行した。



○ 職員さんに聞いた図書館内のお勧めスポット

・ラーニングコモンズ（北館2階）

その名の通り「学びを共有する場」。静寂に包まれた空間というイメージが先行する図書館において、複数人での学習やディスカッションなど、会話を伴った学習が可能な場所。コンピューターや電子黒板も整備されており、模擬授業の練習をする学生の姿も見られる。

お世話になります

附属図書館 特集～

・グループ学習室・セミナー室（北館2階）

ラーニングcommonsはその性質上、隣で行われているディスカッションが耳に入ってきてしまうことがある。「静かなところじゃないと、集中できない。でも話ができる空間じゃないと……」そんな思いに応えるのがこの2つの部屋。後者は事前に申し込みが必要だが、大きなホワイトボードと大人数を収容できるスペースという魅力がある。我々学生広報委員会もぜひ利用したいところだ。

・研究個室（西館3階）・個人学習室（西館4階）

知る人ぞ知る、図書館を“ひとりで楽しむ”究極のスペース。周囲を気にすることなく研究に勤しんだり、資料に目を通したり、と時間を忘れて研究に没頭できる場所。学生証1枚で予約できる。我々記者たちも利用しているが、この広報誌を見て利用者が激増……ということにならないか、密かに心配しているとかいないとか。



ラーニングcommons

○ まだまだある！知られざるマル秘スポット

・西館

多くの職員さんが勧めるのは、なんと西館。ガラス窓が張られた階段を登っていくと、目の前に広がるのは京の山々。あの京都タワーも見えとか。良く晴れた日にはやわらかな陽射しが、そして夕方には夕陽が。学内のささやかな癒しスポットの存在を、どれくらいの学生が知っていたらうか。

～隣の学生さん～

第1回

考古学研究会って何！？



考古学研究会の活動風景

このコーナーでは、毎回、京都教育大学で行われているユニークな活動や独特なサークルなどを特集する。

第1回目の今回、紹介する部活動・サークルは考古学研究会だ。この考古学研究会は昨年に新設されたサークルである。もともと京教には考古学研究会が存在し様々な活動を行っていたそうであるが、解散し長らく考古学研究会は影を潜めていた。それが昨年、新生の手によって復活したようだ。

主な活動としては時代を問わず様々な歴史的施設・土地を訪問し、歴史への関心を深める。そして、考古学の技能を高め、独自の研究を行う。まだ新設サークルなため伝統の活動・研究や輝かしい成績はない。しかし、これから先、梓にとらわれない独創的な活動ができる可能性を秘めたサークルであると言えるだろう。その先駆けとして、今後は京教に保管されている瓦の整理、拓本、調査を行い、調査報告書の作成を目指すとのことだ。ぜひ京教のサークルとして定着できるように頑張ってもらいたい。

京都教育大よ永遠なれ

京都教育大学名誉教授 京都外国語大学教授 齋藤 榮二

ある時突然私の自宅の電話が鳴った。私は福島に住んでおり、電話は京都からの長距離電話であった。電話をかけてきた方は、京都教育大学英文学科の岡田先生と名乗られた。

もちろん、初対面である。いや、御顔を拝見していないから、初対声というべきか。お話の内容は「現在、大学院をスタートする準備中ですが、京都教育大において頂けないでしょうか。」というお誘いであった。急なことなのでちょっとびっくりした。私はアメリカでの留学を終えて、帰ってきてからまだそんなに経ってはいなかった。留学の間、家内は、まだ小さな男の子を育てるのに頑張ってくれた。しかも、家内も教員であり、勤務は附属小学校であった。そこはあの頃提灯学校と呼ばれていたほど仕事が忙しく、帰りの遅い学校だ。しかも私たちは、福島に自分たちの家を建てたばかりであった。私は戸惑ったが、「今はちょっと動けません。」と言った。これでこの話は終わったと思っていた。数日して岡田先生から再度電話があった。岡田先生は「学科会議で、皆んなと話し合ったのですが急な話で齋藤さんも動きが取れないでしょう。来年4月の新学年度よりということでもう一度考えていただけませんか。」と言われた。「少し時間をいただけますか。」と返事した。家内にも伝え、私も考えた。「私が生涯やりたいことは何なのか。」それは、「すぐれた英語の教師を育てるということではなかったのか。京都教育大学では本格的に教員養成に従事できる。」ということが決め手となった。理解を示してくれた家内に感謝するばかりである。新しく建てたばかりの住居を後にして京都で1部屋借りて学生時代のような下宿生活がスタートした。それから、おそらく40年近く京都中心の関西での生活がスタートした。jokeの好きな福島の仲間の1人が「そうすると齋藤さん、教授会なんかも祇園でやるんですかね。」と言った言葉を昨日のことに覚えている。しかし私は小学校、中学校時代を京都で過ごしているので京都に来ることに特別な感動はなかった。ただ京都教育大先生方の温かさに触れたことは枚挙にいとまがない。さて私は京都教育大で何をしたのであろうか。先生方にほとんど知られていないことに触れてみたい。私が附属京都中学校の校長をさせていただいた時の体験である。皆さんの間で生徒の海外交流の話が出始めた。普通なら英語国との交流であるが、私は朝の会で何度か

「アジアの若者と友情を結ぼうではないか。」と言った覚えがある。色々の経過を経て相手の中学校はタイのアユタヤラジャパット総合大学附属中学校となった。1回目の訪問は京都側から生徒15名と付添い教師2名が、冬の京都を発った。団長は、生徒会長であった。底冷えのする京都から熱帯下にあるタイへの旅行と団長としての仕事で彼は熱を出してしまった。ホストの父は、大事をとって彼を病院に連れて行った。彼はホストファーザーに「すみません。」を繰り返した。後は彼に話してもらおう。

「タイに行くことができ本当によかったものすごく思います。ホームステイに行くまで自分自身不安だったのですが、実際に家族と話すとともに楽しく逆にこれからのホームステイに大きな期待を持つことができました。特にタイのお父さんが日本語がうまいことに驚きました。僕がホームステイに来ることが決まってから日本語を習いに行かれたそうです。1分1分が楽しく過ぎて行ったのですが2日目の夜お腹が痛くなりお父さんに連れられて病院に行きました。なんども「痛くないですか。」と聞いてくれてものすごく心配してくれました。病院を出て、家に帰る時、僕は家族全員に謝りました。そうしたらお父さんはこう言ってくれたのです。「お前は私の息子なのだから、気にしないでいい。」これを聞いたとき泣き出しそうになりました。昨日会ったばかりで、あと2日もしたら帰ってしまう人に普通はこんなことは言えないでしょう。

私は早い段階から「挨拶の英語」と「会議の英語」という考えを持っていた。「挨拶の英語」は文字通り good morning という英語であり、親しみを培う英語である。タイを経験した団長は「大きくなったら必ずタイの家族に会いに行く。」と言っていた。そういう人と人との繋がりができると両国がどんなに政治的に対立しても、アユタヤにミサイルを撃ち込むなどという発想は生まれない。思い出しても見よう。かつてドイツが東西に分割され、ベルリンの壁で東と西に分断されていた時この壁を乗り越えようとした幾多の人が命を失った。20年の歳月を経てベルリンの壁が破壊され、人々が自由に行き来できるようになってから壁を越えるために殺された人がいるなどという雰囲気はどこにもなくなった。そういう平和的環境を作るのも英語教師の役割ではないか。力を合わせた附属中の先生方に感謝して。

第 135 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学総務・企画課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

135 号編集後記

広報誌「KYOKYO」をお届けします。本号の特集は「教育研究改革・改善プロジェクトについて」です。

学内では様々なプロジェクトがありますが、小規模ながらも意義の深い二つのプロジェクトを紹介しています。「ダンス・パレット・フォア・スクールズ」は、中学校では必修となったダンスについて、ダンス公演やワークショップを通じて学生や学校教員にダンスの意義と楽しさを理解してもらい、身体を使った表現の仕方を学んでもらうプロジェクトです。また「ライフスキル教育の活用」は授業を通じて、日頃の生活における他者とのコミュニケーションにおいて、言葉の表現の仕方によって相手からの印象が変わる事を実感することによって、上手なコミュニケーションの手法について学ぶ事を目的とするプロジェクトです。この二つのプロジェクトは、日本人が不得意とされている「自己表現」の仕方を学ぶことを扱っており、大事なプロジェクトといえます。

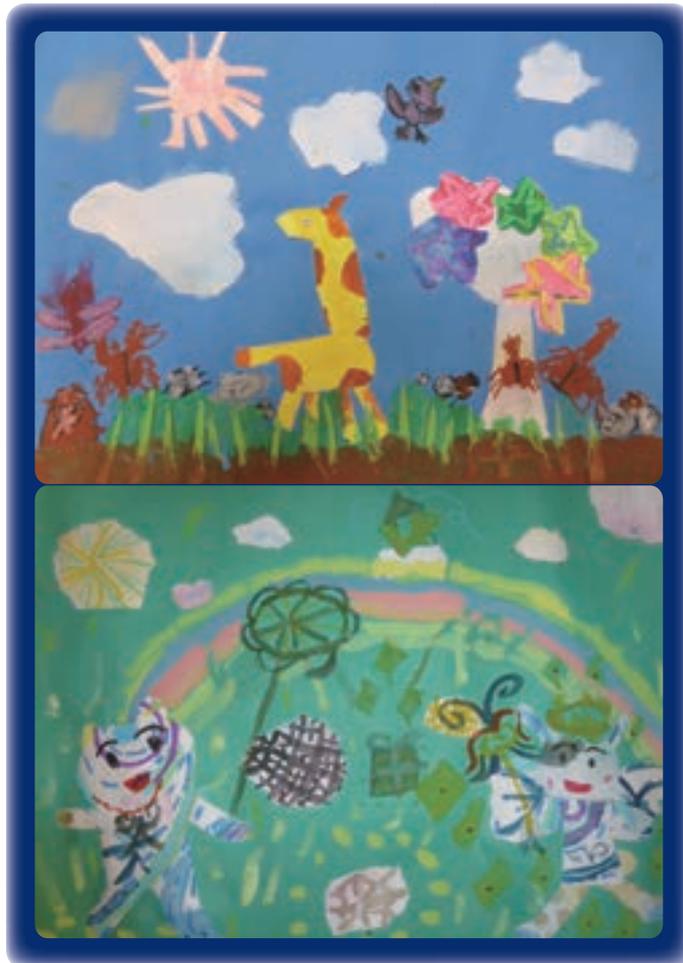
今号の表紙を飾るのは、附属京都小中学校初等部の藤原孟徳さんの作品です。裏表紙上段は同じく附属京都小中学校初等部の太田殉祥さん、下段は賀長凜子さんの作品です。動物たちをテーマにした絵からは、生きいきと描かれたそれぞれの動物の表情を通して動物たちの感情が伝わってきます。表現力の豊かな絵をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 細川 友秀



地域連携・広報委員会

委員長	細川 友秀				
副委員長	丹下 裕史				
委員	濱田 麻里	齋藤 正治	西村佐彩子	吉江 崇	相澤 雅文
	平井 恭子	Andrew Obermeier	井谷 恵子	佐藤 忠司	
事務担当	総務・企画課				



京都教育大学広報 第135号

発行日
2015年3月13日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>